

## 式辞

緑の風薫る麗かな春のこのよき日に松山東雲女子大学八十名、松山東雲短期大学二百十八名、計二百九十八名の新生、編入生をこの東雲に迎えることができ我々桑原キャンパスの全ての者から歓迎し、これからの皆様の学生生活での活躍を応援したいと思っております。

さて、ブルース・リップトンはその著書「思考のパワー」の中でキリストが「汝、隣人を愛しなさい」と言ったのは、アイシュタインの相対性理論で示されている「全ては互いに関連している」という言葉と同じ意味であると言っています。このアインシュタインは宗教を肯定しつつも、神はいないともいっています。このアインシュタインの言葉を私なりに考えると、人類の歴史は約二十万年前、現生人類であるホモ・サピエンスが姿を現しました。自然や科学に対する知識の乏しかった初期の人類は自然の恩恵やその脅威や畏怖に対して超日常的な力、特別な何かの力を感じていたのであろうと考えます。その様な目に見えない何かというものは現代の我々にとっても不安を感じさせます。何故ならば人類は都合の良い経験を心に残すよりも危険な経験、嫌な経験をしっかりと記憶に刻む方が生き延びる

確率が高くなるからです。自然は我々に多くの恩恵をもたらす反面、人類という動物種を生き残らせるための自然淘汰の課題を我々に与え続けてきたと考えます。この二年ほど続くコロナ禍もそのひとつかもしれません。その様な大きな力を初期人類は何か具象化しようとしたのかもしれませんが。かつて古い時代の日本も政治は祭りごととして神事と同等でした。これは宗教的祭祀を行う人が集団の長として、あるいは具現化された神として政治である祭りごとを司っていたものと考えられます。

幕末から明治にかけて活躍した西郷隆盛は「敬天愛人」と書を残し、この言葉をよく使っていたといわれています。つまりキリスト教で言う神を敬い隣人を愛せよと言う意味です。人類の歴史の中で、絶大なる力をもつ自然を神と具現化するのであれば自然を敬いその下で生を営む我々は全て同じである。誰ひとりとして分け隔てることなくお互いに強く関係し、自然の恩恵は皆で分かち合い、その脅威や災難はお互いが相互扶助することで切り抜けよと言うことをブルース・リップトンは指摘しているのかもしれませんが。

また、人間社会では隣人を愛せよと言うことと相反して争いが絶えません。争うという意味のギリシャ語の「competen」は本来「共に生き残る」という意味をもっていたそうです。しかし、現代の我々の人間社会ではその一部が強調され、そして歪められ、生き残る手段という概念がその中核を占める様になってしまいました。本来、ギリシヤ人にとっての競争の概念というのは、相手の力を使って自分の力を引き出すという意味で、相手を敵とみなし、何があっても相手に勝とうとすることではなかったようです。競争・競技は相手がいて初めて成り立ち、自分自身の力を最大限に発揮できる時と場であったと考えます。そういう意味で競争を考えると、今以上の自分自身を育成するものであり、地域社会をギリシヤ人の競争の概念で捉えると今以上の安全で安心な住み良い社会を醸成することであったと考えられます。

さて、この競争の例のようにそこに含まれた意味の良い面を中心に物事を考える、あるいはどうすれば上手くいくかを考える研究分野にマーティン・セリグマンのポジティブ心理学と言う分野があります。彼は幸福な生活をもたらすためには喜び・夢中になること・意味を見出すことの三つを示していま

す。自然の恩恵を分かち合うことはもちろん脅威にしても相互扶助することで自分自身の負担の軽減や脅威の回避のためコミュニティを強固にすることに夢中になり、そうすることで地域連携、人と人が繋がることに社会の安定の意味を見出すことができないのではないかと考えます。つまり、どの様な状況であろうと現実社会の中でより多くに時間と精神のエネルギーを最も多く投入した状況がその人の現実になると言うことです。我々はともすれば辛い現実、嫌な現実、耐え難い現実からは逃げ出したいと言う気持ちがあるが自然と湧き起ります。しかし、逃げ出すだけの人生を選択すると課題の受け皿はいつまで経っても大きくなりません。現実、目の前にある逃げ出した課題は将来の大きな受け皿をもつ自分自身へのプレゼントであると考えられるのもポジティブ心理学的考え方もありません。リチャード・ワイズマンは「運の良い人」と「運の悪い人」の違いを調べました。科学的に「運」と言うものは証明しようもなく事実上ないに等しいわけですが、ワイズマンは心のもち様であり、「自分自身が運に恵まれている」と信じ込む人にだけ「運」は自然とついてくるといっています。心理学ではこれを「予測符号化」といい、自分にとって好ましい結果を、あるいは現状をポジティブに捉える習慣があると「脳」、特に潜在意識

とか無意識と言われる領域がそれを符号化します。そして、その結果が現れた時にちゃんとその事象を認識できます。つまり、幸せやなりたい自分に一步近づけるのです。

サンテグジュペリという作家の書いた星の王子さまという本があります。その中に出てくる王子さまの言葉は蘊蓄のある内容をふんだんに含んでいます。その中で狐が星の王子さまに「物は心で見る。肝心なことは目では見えない」と言いました。今、目に見えるもの、欲しいものというのは本当に自分自身にとって必要な物なのでしょうか。楽しいもの、面白いもの、興味を惹かれるものというのは「今の自分にとって」という条件を付けての見える物、欲しいものです。さらに上を目指すときに必要なものというのは時には辛いもの、過酷なもの、避けて通りたいものである場合が多い様です。しかし、一度そのハードルを乗り越えたと自分自身の視点が変わり、より難しい課題に対応できている将来の許容量の大きな自分が想像できます。

コロナ禍の中でネットやSNSが爆発的に多用される様になり現実的対面でのコミュニケーション参加が希薄になってきてい

ます。ジェームス・キャメロン監督が二千年に発表した映画アバターをエミフルの4DXで観覧した時、近い将来の現実と予想できました。それが今やかなり真実味を帯び可能な時代になりました。そこでは仮想空間でアバターを使って本来の自分とは違ったキャラクターを演出できますし、自分自身の能力以上の分身を活躍させることもできるようになります。しかし、人は社会性の強い動物でコミュニティの中で生きるようにDNAに組み込まれています。我々、現代の人類のDNAは狩猟採取生活をしながら洞穴で生活していた時代からほとんど変化していません。その時代は多くてもせいぜい五十人程度の小さなコミュニティの中で仲間を思いやり体温の伝わる関係性の中で生活していたわけです。それが本来の人類の生き方です。しかし、コロナ禍の中で人と人との触れ合いが希薄な現実は何か大切なものをどこかに忘れている様な気がします。大切にすることは食事、睡眠、運動、コミュニティつまりより野生的な生活様式を我々の心と体は求め続けていると言えます。ジョン・J・レイティはその著書「野生の体を取り戻せ」の中で強く言及しています。

最後にこの四月一日から法律が変わり十八歳で成人とな

りますが、今ここに参列している新入学された皆様の言動の一挙一動は全て責任を伴います。特に十八歳で入学された新入生の皆様は大人であるという自覚のもとに四年間あるいは二年間の学生生活を充実し謳歌して欲しいと思います。我々教職員一同全力で皆様を支援いたします。皆様が社会にはばたき活躍できる日を希求・祈念して私からの式辞といたします。

本日はご入学、本当におめでとうございます。

二〇二二年四月二日

松山東雲女子大学・松山東雲短期大学学長 高橋圭三